再生

「ヘビがほしいわ」

志村オクタビウスは、横にいる永恵果（えいけいか）が言ったその言葉を理解するのに、やや時間がかかった。二人は、今は砂漠となった関東平野のあちこちに聳える、巨大な尖塔都市の一つの中にいる。その八十七階で、手すりに寄りかかりながら話をしていたのである。二〇四五年の六月のことだ。

志村の目は、眼下十数メートルのところに散らばった五、六卓の円形のコーヒー・テーブルの一つを注視していたが、やがて手すりにかけていた両腕に力を入れて体を回し、恵果の方に真っ直ぐ向いた。

「なぜヘビなんです？」と彼は言った。女性が選ぶ動物の名前としては、予想外だったからだ。

「人間には比較的無害だし、ネズミの天敵でもあるし、それに心理学的にも重要な存在だから」

そう答えながら、恵果も半身になって志村の方を向いた。志村はネズミのことまで考えていなかったから、その言葉で彼女が生物学者だったことを改めて思い出した。しかし、彼女が最後に言った「心理学的」という言葉は解（げ）せなかっ

た。生物学は、人間の心理に一体どう関係するのだろう。

彼は、彼女の紺のスカートの脚から視線を逸らして言った。

「ヘビは気味悪い動物なのに、それを再生させることが人間の心にどんな意味があるんでしょう?」

「その話は少し複雑だから、もしよかったら下でお茶でも飲みながらお話しません?」と、恵果は手すりの方へ顎(あご)をしゃくって言った。

喉(のど)が渇いていた志村にとって、願ってもない提案だった。

志村オクタビウスは、東京の六本木区環境部生物再生課の課長補佐である。彼は、絶滅した生物を蘇らせて都市内の環境を整えるというこの仕事についてから、五年になる。仕事がら生物学者や生態学者と話すことは珍しくない。また、その分野のことを大学で専攻したので一応の心得はあった。しかし、心理学となると自信がなかった。人間の心理と自分の仕事とはあまり関係ないと漠然と思っていたのだ。

東京は今、六本木区を含めた八十六の「区」に分かれていて、それぞれの区はほぼ完全に自立していた。ここは、高さ三五〇メートル、地上百三十階の巨大な塔を、特殊な強化ガラスで覆った「自立体」である。政治ばかりでなく、

産業も経済も、この閉ざされた空間内で自律的に営まれている。人々は、この尖塔の中で寝起きし、仕事をし、食料を生み出し、消費し、子供をつくる。議会も行政機構も裁判所も警察も、この尖塔都市の中にあった。人口はざっと五千人だ。

志村は、三階下にあるカフェテリアへ行くために、恵果とともにエレベーターに乗った。このエレベーターは四方がガラス張りだから、降下しながら周囲を眺めることができる。が、ガラスとコンクリートと鋼鉄の骨組みが上下に移動する様子は、あまり美しいとは言えない。たまに天気のいい日には、渋谷や恵比寿の「島」まで見通すことができるが、今日の戸外は黄色く曇って何も見えない。相変わらず砂嵐が吹いているのだった。

人々は「区」のことを「島」と呼ぶことが多い。その方が、実情をよく表しているからだ。海に浮かぶ島が、海水によって大陸や他の島と分離されているように、一つの区は、黄色い不毛の砂漠と人間に有害な環境によって、隣の区と分断されている。区と区の間は頑丈で気密性の高いリニアモーターカーで結ばれてはいるが、その本数は一日せいぜい二、三本である。だから文字通り「陸の孤島」なの

だ。

志村と恵果は八十四階でエレベーターを降り、真ん前にあるカフェテリアの領域に入って、コーヒーを受け取り、丸テーブルの前の椅子に向かい合って腰かけた。

「志村さんはさっき、ヘビのことを気味が悪いって言ったでしょう?」と、恵果は席に着くなり、細い指をコーヒーカップにからませて言った。

志村は白いカップから一口すすり、その苦さに口をゆがめながら言った。

「ええ、そう言いました」

「でも、気味悪さは必要なものだわ」と、恵果は楽しそうに言った。その様子が、何か人を小馬鹿にしたように感じたので、志村はちょっと反論する気になった。

「しかし、ゴキブリやカラスやネズミも気味が悪いですよ。そんなものが人間にとって必要とは思えませんが?」

恵果は、片手を横に振って口をとがらせた。

「その『人間にとって』という考え方が問題だったでしょう?」

志村は、恵果が何を言いたいのか分かっていた。人間にとって快適で豊かな生活を実現しようとして、人類が発明

や開発をどんどん行ってきた結果が、地球温暖化を初めとした環境破壊であり、生物種の大量絶滅であり、土地の砂漠化だったことは、もう誰でも知っている。二十年前に起こった地球環境の大変動は、人類がそういう考え方から抜け出すことができなかった結果である。それによって海面上昇が一気に進み、多くの都市は水没するか、この六本木近辺のように砂漠化した。しかし、地球環境自体が人間にとって有害になってしまった今日、人間の都合を優先させない環境政策は無意味だ、と彼は思うのである。

「永さんは、環境にとって有益な生物なら、人間に有害でもどんどん再生させようというお考えなんですね？」と志村は言った。

「どんどん、というわけじゃなくて、順序よく、必要な時に、適当な個体数を導入すべきだと考えるわ」と恵果は、言葉を選びながら言った。

「そして今は、ヘビを導入すべき時期というわけですね？」と、志村は言った。

「そう、この六本木の島ではね……」と、彼女は隣のドーム状の実験棟の方向を指差した。

各区では、人間が生活する尖塔都市から横へ延びる形で、

トンネル型の廊下で連結された実験棟をいくつか持っている。そこでは、緑豊かな環境を実現させるための実験や、食糧増産のための実験、あるいは遺伝子組み換え種の動植物を飼育・栽培するための実験などが行われている。六本木区の実験棟の一つでは、できるだけ自然な――つまり、二十一世紀初頭までの「自然」にできるだけ近い――環境を再現させる目的で、一年前の二〇四四年から「リバース六本木」というプロジェクトが実施されていた。

　このプロジェクトの最初の一年は、ススキやレンゲ、ナンバンギセル、カタクリなどの草や、ヤブツバキ、アオキ、ヤツデ、シュロ、タブノキなどの木がそこに植えられた。使った土は、その辺にあるごく普通の土に、堆肥などの有機肥料を加えたものだった。だから、植えないはずの〝雑草〟ももちろん生えてくるし、昆虫も数多く発生した。また、ドーム内には空調が働いていたから、プロジェクトが始まって半年もたたないうちに、野球場ほどの広さのドームの土は、緑の草木で一面に覆われた。しかし、問題はその後だった。昆虫を捕食する動物として、何を導入するかで意見がなかなかまとまらなかった。

　そのうちに、ドーム内にネズミがいることが分かった。

それも十匹や二十匹ではない。百単位の数だった。密閉されていたはずの人間の居住区域から、恐らく人間の出入に紛れて流れてきたのだ。また、トカゲやヤモリも発見された。これはきっと、地中に卵が埋まっていたのだろう。つまり、昆虫の捕食者はドーム内にすでに存在しており、気がついた時には着々と数を殖やしていたのである。その頃からである。このプロジェクトに対して住民から疑問の声が上がりだした。「我々はネズミやトカゲのために税金を使うのか？」「見て楽しめるような、小鳥や愛玩動物を殖やすべきだ」「観賞用や食用の作物を育てるべし」――志村もそういう考えに賛成だった。そんな時に、区が香港から招いた環境コンサルタントである永恵果が、「ヘビの導入」を提案したのである。

「自然界には気味の悪い生物はいくらでもいるんだから、ヘビくらいで尻込みするのはおかしいわ」と、恵果は言った。

「尻込みじゃなくて、ヘビでは住民の納得は得られないと思うんですよ」と、志村は不満そうに言った。

「でも、プロジェクトの目的は『自然の再生』なんでしょう？　自然界にヘビがいることに、何の問題もないはずだ

わ」と、恵果は肩をすくめながら言った。

「もちろんそうです。しかし、人間にとって問題なんですよ」と、志村は少し声の調子を上げた。

「だからこのプロジェクトはうまく行かないのよ」と、恵果は無遠慮に言った。「『人為的な自然』なんてどこにも存在しないのに、人間は自然を自分の好みで造ろうとしている。それはもう、本当の意味での自然ではないでしょう?」

大きな身振り手振りで話す彼女を見て、志村はもっと核心に触れる話をしなければならないと思った。

「永さん、自然はもう人間の味方ではないんです。少なくとも、今の自然——このガラスの外にある自然は、我々の敵です。紫外線が肌を侵し、砂漠で作物はできず、奇妙な生物ばかり殖え、雨が降れば強い酸性だし、砂嵐は目や呼吸器を傷めます。そういう自然の災いから身を護るために、我々はこんなドデカい建物を造り、ガラスで蔽ったのです。この街そのものがすでに巨大な『人為』なんですから、その中で再現される自然が『人為的な自然』でなくて何でしょうか?」

ここまで一気に言ってしまってから、志村は恵果の表情を窺った。この学者先生を怒らしてしまったかな、と心配

になったのだ。

「わかったわ……」と、恵果は静かに言った。しかし、彼女が納得していないことは、真っ直ぐに志村を見るその視線から感じられた。「でも、仮に『人為的な自然』を目指すにしても」と彼女は続けた。「自然である以上は、人間に都合の悪いものも含まれている必要があります」

彼女の語尾には力が入っていた。

「なぜですか？」と、志村は言った。

「人間を恐れさせるため、ね」と恵果は言った。そして「さっき心理学的に重要だと言ったのは、そのことなんです」と続けた。

志村は、やや混乱していた。この中国人の美人学者は、有害な自然から自分たちを護るためであっても、人間に不都合なものが必要だと言っている。そして、その理由は「人間を恐れさせるため」というのだ。

「人間には恐怖が必要というわけですか？」と志村は言った。

「『恐怖』というよりは『畏怖』という日本語の方がピッタリ来るかしら……。『畏怖の思い』『畏敬の念』という言葉があるでしょう。それを失ったために、現代人は自然界

のあらゆるものを自分たちの道具にしたではありませんか。その結果が今、目の前にある。自然を畏怖する心の元は、生物学的な、あるいは生理的な恐怖です。落雷を身近に経験したり、猛獣と出会った時の恐怖ね。二十世紀までの人類は、そういう恐怖の対象を『神』として祀ることによって、自然の秩序を維持してきたわ。でも神のいない現代には、もうそれがない。だからヘビが必要なんです」

志村は驚いていた。地球の自然の秩序は、多様な生物の相互依存関係によって保たれてきたと考えてきたのに、恵果はそれだけでは足りず、人間が畏怖の心を取りもどさなければならないと言っている。だから、ヘビを「神」の身代りとして導入しろというのだ。「神」なんて、志村は長いこと考えたことがなかった。そんなものは旧世紀の遺物だと思っていた。今さらそれを持ち出して上司を説得し、ヘビの導入を議会に承認させることなどできるだろうか？

「永さん、そういう複雑な提案は、議会を通りませんよ」と、志村は低い声で言った。

「大丈夫！」と恵果の明るい声が返ってきた。「もっと単純な提案にすればいいの」と彼女は言いながら、持ってい

たバインダーの間から紙の束を取り出した。

「ここに議会向けの提案書があるから、読んでちょうだい。『六本木神社の建立』という題です。趣旨は、二十世紀の良き伝統の復活ってとこかな。あくまでも文化行事として提案するのね。御神体は、もちろんヘビ。ポイントは宗教色をできるだけ薄めて、お祭り色を出すことね。その案が通れば、ヘビの導入までは時間の問題だと思うわ」

そう言うと、恵果は颯爽（さっそう）と立ち上がった。

署名は検証されていません。

Masanobu Taniguchi

電子署名者：Masanobu Taniguchi
DN: cn=Masanobu Taniguchi, o=Seicho-No-Ie International Headquarters, ou=Vice President, c=JP
日付：2003.01.18 12:50:14 +0900'
理由：この文書の著者
場所：Tokyo, JAPAN